

<PGI 学術講演抄録> ※無断転載を禁じます

『 Modifying Strategies for Periodontology and Implant Dentistry: 歯周病インプラント治療と遺伝子検査』

辻 翔太

歯周病インプラント治療は、1970年代の歯周組織再生療法の登場以来、様々な歯周組織再生治療に関するマテリアル、インプラント治療、レーザー治療、多岐にわたる歯肉歯槽粘膜手術、マイクロスコープの利用などが登場し、目覚ましい発展を遂げてきた。このような生命科学における技術、研究の進歩は、治療に関するものであり、2015年時点で、歯周病の発症、進行、予後のリスクを確実に判定するためのツールを我々は未だに持ち合わせていない。

歯周病は、病因因子として、宿主因子、細菌因子、環境因子を持つ多因子疾患である。三因子のうち、細菌因子に関しては、1998年のSocranskyの歯周病原細菌の分類以降、red complexを中心に、様々な臨床研究が行われている。一方、宿主因子、環境因子についての研究は比較的少数である。

近年、遺伝子研究が盛んになり、環境は遺伝子に影響を及ぼすことが解明されたため、遺伝子は宿主因子のみならず、環境因子でもあると考えられる。これにより、遺伝子は、歯周病の病因の中で重要なファクターであると認識されるようになり、遺伝子を検査することで、歯周病の発症リスクを予知できる可能性が出てきた。

今回、臨床家として今後必要となるであろう、歯周病発症、進行を予測するための遺伝子試験、そしてその結果をどのように臨床応用できるのかについて、最新の科学的根拠を用いながら、ご紹介させていただきたい。